

(2) 3期生活動レポート

庄内地区担当 中島 麻衣

中山地区担当 北原 保奈美

寿地区担当 小林 克紀

本郷地区担当 槇石 和直

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

庄内地区担当 中島 麻衣

1 庄内地区の概要及び地域課題

庄内地区は松本市の東南郊外に位置し、土地区画整理事業による大型商業施設や宅地造成等、新しい「まちづくり」が進んでいる地域である。

地区公民館には『子育て委員会』という独自の委員会があり、未就園児の親子が楽しく過ごせるイベントを行う「ちびっこひろば」を毎月開催している。また、子ども会育成会では小学生が企画段階から関わって実施される「やまびこ子どもまつり」や三九郎講習会等、地区をあげて子育てに力を入れている。

地域の課題として、①防災、②地域包括ケア、③子どもの体験不足の3点を考える。防災と地域包括ケアについては、「庄内地区まちづくり協議会」で取り上げられている課題でもある。

(1) 防災

庄内地区は牛伏寺断層を震源とする大規模地震や、河川の氾濫による水害被害が起りやすい地域である。そのため、防災訓練の実施や、水害に遭った際の写真や記事を町内公民館に掲示している所がある等、防災意識が高い町会が多い。災害時に助け合えるためにも、日頃からの見守りや防災への備えを意識し、「自助」、「共助」、「互助」の取り組みが重要である。

(2) 地域包括ケア

地域包括ケアシステムの構築は国が進める重要施策の一つで、本市でも積極的な取り組みが行われている。「庄内地区で安心して暮らし続ける」ために、医療や福祉・行政・地域の連携が不可欠である。地域包括ケアの背景として挙げられるのは、超少子高齢型人口減少社会の進行、認知症や独居高齢者の増加、身近な地域での繋がり希薄化等の課題がある。

(3) 子どもの体験不足

核家族化やインターネットの普及等、子どもを取り巻く環境が変化している。そのような状況の中で、地域との関わりや伝統行事の伝承が少なくなり、子どもが「体験する機会」というものが失われつつある。庄内地区ではコミュニティ・スクール事業が取り組まれていることもあり、子どもを家庭や学校のみならず『地域で育てる』取り組みが必要だと痛感する。

2 インターンとして取り組んだ事業

今年度は、地区公民館や地域行事等できるだけ多くの活動に顔を出すことを目標に、次の二点について主に取り組んだ。

(1) 子どもの居場所事業「なみカフェ」

一つ目は並柳団地町会で行われている子どもの居場所事業『なみカフェ』への参加である。なみカフェは町会長のSOSから、長野県県民文化部こども・

家庭課の子どもの居場所づくりモデル事業（信州こどもカフェ事業）として採択され、平成 28 年 7 月に開始した。今年度は「松本市子どもの未来応援事業」として松本市こども部こども福祉課により支援が引き継がれている。

なみカフェは町会のほか、NPO 法人や松本大学等、多くの人々が関わっている。そうした中で、私は 4 月から「コーディネーター補佐」という立場で、主体を順次地元に移していくという役割を負い、本事業に関わっている。今年度は月 4 回開催し、平均参加者は初秋から約 14 人（/回）と春・夏の 2 倍になっている。

(2) 町会活動への参加

二つ目は、町会活動への参加である。地域づくりにおいて、人との関係性（信頼関係）を築くことが大切だと考える。そのためには、まず地域の人々と顔の見える関係を作り、地域のことを知ることが初めの一步と考え、公民館事業や福祉ひろば事業、町内活動等へ積極的に参加した。

今年度「庄内地区まちづくり協議会」で実施された、筑摩小学校での「第 1 回避難所運営訓練」の進行役や、講師を招いての「認知症勉強会」への参加を通し、地域にとっての防災や地域包括ケアの必要性、住民の意識を体感した。また各町会のサロンや納涼祭等へ参加し、町会ごとの雰囲気や特色・工夫を感じ、会話の中から地域の願いや困り事等を聞くことができた。

3 事業の成果

前述二項目の取り組みについて、自己評価を行う。

(1) 子どもの居場所事業「なみカフェ」を通して

今年度のなみカフェを通しての成果は、以下の通りである。

ア 「体験」の重要性

なみカフェでは学習支援や食事、遊び、会話等の中で、子どもたちに自然に寄り添うこと、子どもたちの「体験」を見守ることを基本姿勢にしている。活動をしていくうちに、「体験」には手伝いや家庭料理を皆で食べることも含まれると気がついた。大勢で食事をするだけでひとり親家庭や共働きで親の帰りが遅い家庭の子どもの“孤食”を防ぎ、マナーを伝えることもできる。そのほか、失敗も体験とし、成長する上で知っておかなければならないこと（水をこぼした時の対処法など）を考えるきっかけをつくることも大切である。

イ 保護者との関わり

秋頃から夕方になみカフェがある日（16 時～19 時オープン）は保護者が迎えに来ることが多く見られる。昨年度はいくら暗くても保護者が迎えに来ることはなかったそうだ。そのため、保護者と顔の見える関係になり、話ができるようになったことは進展である。何人かの保護者から直接「仕事で帰りが遅いから助かっている」「子どもがいつも楽しみにしている」等の話も受けた。今年度はイベントや行事を通して保護者と関わりを持つことができたので、今後も少しずつ関係づくりをしていきたい。

ウ なみカフェの定着

先にも述べたように子どもの参加者数が増え、夏休み以降ほぼ毎回参加してくれる子どもも何人かいる。なみカフェは子どもたちの口コミで広がり、友達や妹弟を連れてくる子もいる。また、初めのうちは友達と一緒に来ていた子が一人でも来てくれるようになった。「②保護者との関わり」においても考えられることであるが、次第になみカフェが地域の中で定着しているのではないか。子どもが家や学校でなみカフェの話をすることもあるそうで、子どもたちにとっての『地域の中の自分の居場所』として確立されつつあると考える。

(2) 地域事業への参加を通して

地域事業への参加を通しての成果は、以下の通りである。

ア 町内を越えて話し合う場づくりの必要性

今年度、全てではないが各町会のサロンや活動に参加し、世間話から町会の魅力や困り事を聞くことができた。その中で、「他町会のサロンで何をやっているのか気になる」という声が多く聞かれた。そこで各町会の悩みやサロンの運営などについて気軽に話し合える場づくりをし、他町会との交流を図り、悩みの改善や今後の町会での取り組みへのヒントに繋がるようにしたい。

イ 地域での見守りの重要性

地域事業への参加を通して、地域の人から情報を頂いたり、得意なことを持っている人を見出せたりした。その中で、日中独居になる人や老々世帯が、民生児童委員の見守りから溢れてしまっているという話を伺った。そこで“困っている人に対して何かできることをしたい”と熱い思いを持っている人がいることや、庄内地区まちづくり協議会による「認知症勉強会」において実施したアンケートの結果からは、身近な見守りで“どこまで踏み込んでいいのか”というもどかしさを抱えている人がいることもわかった。

4 1年間を振り返って

この1年は職員や地域の人に本当に助けられた。地域に積極的に出て行くことを後押ししてくれ、出て行った先では地域の人たちがあたたかく迎えてくれた。幅広い関わりを持つことができ、自分の経験を多く積むことができた。

今年度の成果や課題を踏まえ、来年度は次の二点を軸として研究を進めたい。一つは、なみカフェや地区公民館において地域の人々と連携しながら、子どもを主体とする三世代交流の場づくり。子どもたちの声を聞きながら体験の場をつくることや、地域の中で得意なことを持っている人と繋がり、交流を深めることを目指す。もう一つは、地域での新たな見守り体制の基盤づくりに取り組

むことである。日常生活で困り事を抱えている人のニーズ発掘と、困っている人に対して“できること”を持っている人との連携を強化する。また、一人では決して行えないので、周りに相談・報告等を欠かさず、地域の人々の思いを聞きながら一緒に地域づくりをしていきたい。



なみカフェ おもちつきの様子



高齢者の語り場・息抜きサロン
「ひととき」

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

中山地区担当 北原 保奈美

1 中山地区の概要及び地域課題

中山地区は松本市南東部に位置し、東の鉢伏山とそれに連なる峰を隔てて入山辺地区、里山辺地区、岡谷市、西は中山丘陵、南は牛伏川を挟んで寿地区、内田地区に接している。地区の大部分は中山間地であり、西端には平成に入って造成された住宅地がある。面積は 21.49k m²、人口 3,417 人、世帯数 1,362 であり、高齢化率 36.0%となっている（平成 30 年 1 月 1 日現在）。

中山地区からはこれまで多くの土器や石器、遺跡や古墳（80 基）が発見されており、地区内の松本市立考古博物館ではその歴史に触れることができる。また、室町時代には埴原城が築城され、戦国時代には小笠原氏の配下にあったとされている。明治 21 年、市制町村制の公布により「中山村」が成立し、昭和 29 年には中山村全地区が松本市と合併した。平成元年には寿地区に隣接する丘陵地に住宅団地が造成され、平成 3 年には「棚峯町会」となり、和泉町会、埴原北町会、埴原東町会、埴原南町会、埴原西町会、棚峯町会の 6 町会による現在の中山地区となった。

超少子高齢人口減少社会が進む中、中山地区も今後さらなる人口の減少と、高齢化が見込まれる。そうした人口減少により、空き家や荒廃農地の増加、地域活力の低下、また、少子高齢化が進むことで、自治活動の衰退や、歴史・文化の若い世代への継承が困難になることが予測される。このような地区の課題に取り組むため、平成 26 年 10 月に「中山地区地域づくり協議会」（以下、地域づくり協議会）が発足した。「住んで良かったと思える中山地区を目指して」をテーマに、地域活性化部会、福祉対策部会、防災・環境保全対策部会の 3 部会が中心となり活動を展開している。

地域づくりインターンとして、各部会の会議や活動に参加し、協議会の委員との関わりを深める中で、地域づくりの側面において 3 つの課題があるように思われた。

1 つ目は、部会の中で情報共有を図る機会が不足しているという点である。会議の中で部会長の地域づくりへの強い想いは伝わるものの、委員一人ひとりの意見や想い、それぞれの活動における困りごとなどを掘り下げ、みんなで話し合える場が少ないように思われた。

2 つ目は、部会を超えての活動があまりなく、横の繋がりがないために、部会相互の情報交換が十分に図られていないという点である。他の部会でどのような活動が行われているのか共有されておらず、協議会全体としての取り組みが把握されていない状況が見受けられた。

3 つ目は、中山地区で行われている地域づくりが、情報として効果的に発信されていないという点である。各部会の会議に出席する中で、地域づくりの活

動を3年間に渡り行ってきたが、その活動自体が住民に知られていないという声が聞かれた。そのため、住民の方々にも地域づくりに興味を持ってもらえるように、地域の情報誌として毎月発信してはどうかという提案もあった。

2 インターンとして取り組んだ事業

- (1) 中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」

平成29年10月、地域づくり協議会が発足して3周年を迎えた。そこで、これまで協議会が取り組んできた活動を振り返るとともに、委員それぞれの思いを出し合える場として、中山地区地域づくり協議会3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」(以下、懇談会)を企画・提案した。そこでは、地区外の識者の意見も聞きたいという協議会の声から、松本大学の白戸教授の講演も計画した。各部会の委員全員に声をかけ、当日はスタッフ含め総勢50名の参加があった。

また、地域づくり協議会とは別組織で、毎年自分達で歌を作り発表会を開催している「うたづくり同好会」と、他地域からの活動参加も増えてきている「ねこつぐら同好会」の方々にも参加いただき、活動の経緯や取り組みについて紹介してもらった。その中で、「うたづくり同好会」の方々に音頭を取ってもらい、中山地区を題材にした歌「中山は山の中」を参加者全員で大合唱した。この歌は、「うたづくり同好会」の代表の方が仲間と作った歌だが、知らない人も多くいたため、この機会にぜひ知ってほしいという思いも込めて、合唱の場を作ることにした。みんなで歌うことにより、一体感を感じることができた。

白戸教授の講演では、地域づくりを行う上でのポイントを話してもらった。地域づくりに対して、真面目すぎる程真剣に取り組んできた中山地区にとっては、新鮮な講演内容であり、自分のやりたいことが地域づくりへと繋がるという今までとは違った視点で地域づくりを捉える機会となった。講演会が始まる前までは、参加者はとても硬い表情であったが、講演が進むにつれて笑顔が増えていった。

後半の意見交換会では、講演を聞いての感想や意見、また中山地区について、自由に話してもらった。中山地区ではこれまで意見交換会という機会があまりなかったため、どうなるのか不安が大きかったが、「中山は山の中」の合唱や講演により場が和み、予想以上に意見が交わされ、懇談会は盛り上がりを見せた。参加者のいきいきとした表情がとても印象的であった。

- (2) 地域づくりニュース「ふるさと中山だより」作成

中山地区で行っている地域づくりが、住民に認知されていないという町会長の声を受け、地域づくりニュースを発行することとなった。これまで公民館や福祉ひろばでは別々でお便りを発行していたが、最近は公民館だよりと福祉ひろばだよりをひとつにして発行している地区が増えつつある。そうし

た他地区の取り組みも参考にしながら、一枚で地区の情報を得られるよう、中山地区でも公民館だよりと福祉ひろばだよりをひとつにし、尚且つそこへ地域づくりニュースも取り入れ、「ふるさと中山だより」として発行することとなった。

また、地域づくり協議会の各部会には、広報担当が2名ずついるため、活動の記事をあげてもらっている。私は、広報担当があげてくれる記事を取りまとめ、時に編集を加えながら地域づくりニュースを作成している。これまではモノクロのものを回覧していたが、新たに「ふるさと中山だより」を発行するにあたり、すぐに目につき、内容に関心を持ってもらえるよう、また、いつでも手に取って見ることができるよう、全ページカラーにしたものを全戸配布することとした。

3 事業の成果

(1) 中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」

懇談会の中で行われた意見交換会で出された参加者の声を一部紹介する。

- ・ 地域のためでなく、自分のために。地域をどうするのではなく、自分はどうするのか、したいのか。という講演を聞いて気持ちが楽になった。
- ・ 中山には資源がたくさんある。その資源を活用していく方法を考えていきたい。
- ・ 役員をやったおかげで行動から意識が変わった。役員をやってははじめは嫌だったけど、行動したことでいろんな発見や出来ることがあると気づいた。
- ・ 自分でやれることが地域づくり。なるほどなと思った。
- ・ 仲間をつかって一緒に楽しく活動したい。

このような前向きな意見がたくさん出された。これまで中山地区においては、多くの住民が膝を突き合わせて意見を出し合う機会が少なかった。しかし、今回このような場を設け、今まで口にする機会のなかった自分の想いや考えを出し合うことで、中山の良いところや課題、問題点が今まで以上に見えてきたのではないだろうか。一人で抱えこんでいると、視野が狭くなり、見えるものも見えなくなってしまう。住民が集まり、膝を突き合わせて話すことで、地区をさらに深く捉え、さまざまな視点から地区を見ることができるよう、新しい発見や活動の発展にも繋がっていくきっかけになったと思われる。

今回のこの事業は、始めの一步に過ぎないが、はじめに述べた課題に取り組み、活動に一体感を持たせるためにも、みんなで集まり地域について語る機会は必要だと考える。また、地域づくりの活動を幅広く捉えるためにも、地域づくり協議会だけでなく他の地域づくり活動団体も巻き込み行う必要もあると考える。

(2) 地域づくりニュース「ふるさと中山だより」作成

「ふるさと中山だより」を発行してから間もないため、成果としてはまだ目に見えてきていない。ただし、今までと違ってカラーで見やすいという声や一枚でさまざまな情報を得られること、また、全戸配布にしたことにより、住民がいつも手元に置いておける点では町会長や住民からの評価はよかった。

私が担当している地域づくりニュースは、今年は地域づくり協議会で行ってきた活動をメインに掲載してきたが、内容としては活動報告だけになってしまった。住民により興味を持ってもらえるように、活動をしている側の視点や声を届ける必要があると感じた。これからは、地域づくり協議会の活動だけでなく、地域全体を捉えた幅広い内容の紙面にしていきたいと考える。自ら取材をするなど、住民の声も届けられるような紙面を目指すとともに、少しでも多く中山の地域づくりに興味をもってもらえるような内容を掲載していきたい。中山地区の情報誌といえば「ふるさと中山だより」と地域の方々に声を揃えて言ってもらえるような、身近な存在となるよう成果を出していきたい。

<地域づくり協議会発足3周年懇談会の様子>



4 1年間で振り返って

この1年は、主に地域づくり協議会の活動に携わってきた。その中で感じたことは、「中山の良さをもっと知ってほしい」、「中山をもっと良くしていきたい」という想いで地域づくりに関わっている人がたくさんいるということだ。しかし、そのように強く想うのと同時に、地域づくりを硬く捉えてしまい、行き詰っているようにも見受けられた。地域づくりのやり方に、明確な決まりごとではなく、正解もない。今回、懇談会に取り組む中で、地域づくりは「地域のためにどうするか、何ができるか」と考えがちだが、自分がやりたいこと、好きなことを取り組むことで、その一つひとつが地域づくりに繋がっているということ、私自身改めて学ぶことができた。今後の活動では、目的を明確に持ちながら、「地域をどうするか」ではなく、「自分はどうするか」と思考を変え、時にはいろいろな視点から地域を見ていきたい。

また、中山地区は、地域づくり協議会だけでなく、さまざまな団体が活動に取り組んでいる。そのような、地域づくりに一生懸命に取り組んでいる団体や人を繋げていくことができればさらに活動の幅は広がり、さまざまな活動の展開にもつながっていくと思われる。私自身の次のステップとしても、地域づくり協議会や他団体、また地域づくりに関心がある人など、さまざまな組織や人を巻き込み、横のつながりを構築できるような活動を展開していきたい。

これまで地域の方々と交流を深めていくなかで、中山でやってみたいことやアイデアなどを耳にすることが多くあった。地域の「やってみたい」を少しでも実現できるよう、地域づくりインターンとして住民と共に更なる資源の発掘と、「人・モノ・場所」をつなげるパイプ役にもなっていけたらと考える。

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に関わって

寿地区担当 小林 克紀

1 寿地区の概要及び地域課題

(1) 地区概要

寿地区は松本市街地から南方6kmほどに位置しており、12町会から成り立っている。人口は14,399人(平成29年10月現在)となっており、松本市内で5番目に人口が多い地区である。高齢化率は22.5%と市の平均値よりは低い数字となっているが、年々高齢化・少子化が進展していくことが予想される。地区の特徴としては平成21年に発足した「寿地区学校応援団」が寿小学校の各学年と連携しながら様々な企画を行っていることから、「地域と子どもの交流の多さ」が特徴として挙げられる。

(2) 地区課題

「子どもは寿の宝、地域の子どもは地域で育てよう」を合言葉として、寿地区学校応援団の活動が盛んに行われている。地域と小学生が交流する機会が多くあるものの、寿小学校の小嶋校長が「もっと地域の方が小学校に気軽に来てもらえるような環境にしたい」と発言しているように、現時点では日頃から地域の方が自然と校内にいる環境には至っていない事がわかった。また、PTA役員から「放課後の子どもの居場所がない」といった話を頂いたことがあり、地区内における子どもの居場所に関する課題もいくつか見えてきた。

2 取り組んだ事業内容

(1) 「空き教室利用プロジェクト」

このきっかけはPTAの役員から、地区子ども会育成会長の五味氏に対して、「子どもの居場所が無いため欲しい」という話が出たことから本プロジェクトは始まった。五味氏も「昔ながらの遊びを子どもたちと行いたい」という思いを、寿小学校の小嶋校長に対して持ちかけ、校内の使用していない教室を借用できることとなった。地域づくり協議会児童福祉部会でも「子どもの居場所づくりを行いたい」とのことから、児童福祉部会を中心に11名によるプロジェクトチームを結成。8月末から教室利用の計画を進めることになった。

(2) 意見交換会でわかった小学校の新たなニーズ

9月に入ったところでプロジェクトチームと寿小学校との意見交換会を行った。当初のプロジェクトチームとしては、放課後の時間に子どもの居場所づくりとして小学生との交流を行いたいということを学校側に伝えた。これについて「空き教室を使った居場所づくり」に関しては賛成の意見をもらったものの、学校側の現状として①学校を地域の方が気軽に出入りできる環

境にしたいが、その環境となるまでの関係にはまだ至っていないこと②クラスメイトと関わるのが苦手な子は休み時間に校長室へ遊びに来ていることの2つの理由から「放課後よりかは昼間の時間を使って行うのはどうか？」という提案であった。また「空き教室を地域の方のための部屋とし、地域の人がお茶を飲みながら子どもと会話をするというだけでも意味があるのではないか？」という意見もあった。この日の時間内では、空き教室の利用に関する方向性は完全にはまとらなかったものの、空き教室を活用するということに関して前向きな返事をもらい、小学校の現状とニーズを知ることができた。この意見交換会の後、専門部会や地域の現状や課題について話し合う地域づくり推進会議で再度方向性を練り直したところ「実施しながら変更していくことも頭の片隅に置きながら、初回は昼間の時間に行う」という方向で話がまとまった。

(3) 上田市立神科小学校「ゆうゆうタイム」視察

児童福祉部会長である竹渕氏が、他地域で空き教室利用を既の実施している団体があることを発見し、視察研修を行うことになった。上田市にある「ゆうゆうタイム」では、地区の学校支援ボランティアである「おたすけっ十有志隊」により行われており、2時間目の休みの時間にかつて未使用であった教室をボランティアルームとして使用し、有志隊メンバーと子どもたちが自由に遊んでいる。

11月27日の視察当日は、上田が丘公民館にて上田市の地域活動についての話を聞いたあと、実際に「ゆうゆうタイム」に参加し、有志隊メンバーとの意見交換会を行った。

視察研修詳細

日時	11月27日(月) 8:00 集合 16:00 解散
参加者	18名
視察場所	上田が丘公民館、神科小学校ボランティアルーム
内容	上田市公民館活動学習、ゆうゆうタイム見学・意見交換会



※写真左から「有志隊メンバー打ち合わせ」、「ゆうゆうタイム」、「意見交換会」

(4) 上田市立神科小学校の「ゆうゆうタイム」視察結果

この視察研修を通して、実際に「ゆうゆうタイム」に参加することで 20 分という時間でも十分遊ぶことはでき、むしろメリハリを持って行うことに適した時間だということわかった。2 時間目の休みの時間に行うことにより①他学年同士のつながりの場となっている。②ゆうゆうタイムが息抜きの時間となってその後の授業に向き合うことができる。③同じクラスの子と上手く交流できない子にとっての居場所になっている。といった良さを発見できた。また、終了後の有志隊メンバーとの意見交換会では不安材料について質問ができ、視察参加者の「寿でも同じような内容でできそうだ」といった前向きな気持ちへとつながった。

(5) 講座としての空き教室活用

小学校との意見交換会にて「空き教室を“地域の方のための部屋”としてだけ使用するのはいかがでしょうか」といった提案があり、普段は公民館で行われている「古文書講座」が空き教室にて行われた。参加者は小学校に入るのは「子どもが小学校を卒業して以来」、「初めて」といった方が数名おり、公民館や福祉ひろばを頻繁に利用している方でも小学校へ行くという機会は少ないことがわかった。空き教室を講座など別の事業の会場として利用することでより「地域に開かれた学校」になるのではないかと改めて感じた。

3 振り返り

寿地区に配置されてから空き教室の活用に関わり地区の小学校との話し合いを重ねた。この話し合いにより小学校の現状を知ることとニーズの発見へとつながった。今後は 1 月下旬を初回とし 3 月までに、計 3 回、空き教室を利用した子どもの居場所づくりの事業を行うことが予定されている。そこで今年度は、地域の参加者と子どもたちの双方の視点からどんな利点があるのかを探して来年度の活動へつなげたい。また、この空き教室利用以外には寿地区学校応援団による子どもとの交流行事や福祉ひろばが開催するふれあい健康教室に参加してきた。これらの活動には継続して参加していきたい。

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

本郷地区 榎石 和直

1 本郷地区の概要及び地域課題

本郷地区は、松本市の東北に位置し中心部には古い歴史を持つ浅間温泉がある。人口は、約 15,000 人で面積の 83%を山地が占めている。地域課題としては、人口の高齢化が挙げられており、地区人口における 65 歳以上の高齢者は約 4,000 人で本郷地区全体の約 30%に値する。(内 75 歳以上は約 2,300 人) 本郷地区は町会数が 26 あるが、特に高い高齢化率が課題となっている町会が複数あり、その中でも浅間温泉第 2 町会は、高齢化率 50%を超え、今後の人口減少も懸念される。

さらに、本郷地区は町会未加入の大学生の人口も多いと考えられるため、移動人口を除く実質定住人口における高齢化率はより高いものと予想される。

このような背景の中、本郷地区では、平成 28 年度～29 年度にかけて高齢者の居場所や、生きがいづくりなどを目的とした多くの「サロン」が結成された。「サロン」とは地域住民が気軽に集える縁側、たまり場のことを指す。

現在、本郷地区の 6 町会を始めとした「町会サロン」(洞町会、原町会、浅間温泉第 1 町会・第 2 町会・第 7 町会、横田第 7 町会)と本郷地区のボランティア協議会に所属する「にこにこ会」が主体となっている「にこにこサロン」の全 7 ヶ所のサロンが活発に活動している。

本郷地区の平成 30 年度から始まる新しい福祉計画の中では町会や地域におけるサロン活動の推進が挙げられており、今後の本郷地区全体のサロン活動についても注目されている。そうした現状の中、サロンの運営に直接関わるボランティアの皆さんと直接会話をすると、「自分たちはこういったやり方をしているけど他の町会はどういったことをしているの?」という質問をされることがあった。

本郷地区は、サロン活動に熱心な方が多い一方、情報発信や意見交換に適した場が不足しているという状況が感じられた。私は、それら課題の改善を考え、サロンの内容に触れ、ボランティア同士が交流できる場の設定や、活動内容を発信する方法をテーマにこの 1 年間活動を進めてきた。

2 インターンとして取り組んだ事業

私は、本郷地区それぞれのサロン活動を紹介する目的でビデオカメラでの撮影を行った。このビデオの映像は、上記で触れたサロンの情報発信を目的として作り上げたもので、1 ヶ所約 3 分程度のものを目安に編集作業も行い、本郷地区のサロンを紹介するビデオクリップとして仕上げた。

このビデオクリップは、平成 29 年 10 月 19 日に行われた「本郷地区地域

ケア会議」と同年 12 月 4 日に開催した「本郷地区サロン・ボランティア交流会」で上映された。

「本郷地区地域ケア会議」では、1ヶ所のビデオを流した後、実際にサロンに携わるボランティアの方の話を書くという時間を設けることとした。その点を踏まえ私は、ビデオではサロンの雰囲気、「おおよそ」伝わるように心がけ概要説明も字幕を使ったシンプルなものに抑えた。また、「おおよそ伝える」とはビデオクリップそのものでは、サロンの詳しい概要や内容には触れず、映像での説明を控えることで、視聴者の疑問をそのまま「生の声」として議論の場に組み込むように工夫をした。また、より詳しいサロンの概要は、当事者であるボランティアの皆さんに直接語っていただき、サロンに関する説明に厚みを持たせるよう意識した。ビデオクリップは議論をかわすための素材とし、町会、団体同士の交流を盛り上げるための道具として活用した。



本郷地区地域ケア会議、楽しげに話をされる参加者たち。ワークショップも盛り上がった。

3 サロン・ボランティア交流会の実践

「本郷地区地域ケア会議」では、サロン活動を広く知ってもらうことを主題としていた。参加者の層も幅広く、町会や市の職員をはじめ、NPO法人関係の方など多種多様な方が大勢参加されていた。サロンに関わっている方も参加されていたが、サロン運営についての議論が交わせたかどうかは個人差があった。

「地域ケア会議」は、本郷地区のサロン活動を地区全体に周知してもらう場としては適していたが、「サロンについて意見交換する」というテーマを考えた場合、参加者の目的の差異から限界があった。そこで私は、ビデオクリップ制作を進める一方で、町会や地域のサロンの関係者やサロン活動に興味のある方にターゲットを絞った「本郷地区サロン・ボランティア交流会」を企画した。

本郷地区のサロンの中には、10年以上の歴史を持つ町会の伝統行事のようなサロンもあるが、ほとんどは結成されて1年未満のものが多い。また、これから町会サロンを開催したいという声も聞くことがあった。そういった状況の中開催された「本郷地区サロン・ボランティア交流会」は、地域ケア

会議にて使用したビデオクリップの上映の他にサロンに雰囲気近づけるための工夫として当日にお菓子や、お茶などを用意して座談会を行うことで、日ごろの町会や団体の枠を超えて交流を深めることに成功した。



配布したDVD



サロン・ボランティア交流会の

4 事業の成果

これらの活動の成果としては、まずビデオクリップ制作により、本郷地区の地域活動を客観的に捉える資料としての役割を果たすことができた。動画を試聴し、その感想を交換し合うことで、日頃の町会サロンについての議論を交わすことができたという点は、これまで「ボランティアの交流」が少なかった本郷地区のサロン活動において大きな意味を持つものであった。

また、「サロン・ボランティア交流会」は、初の開催であったため、当日の段取りや進行の面で課題があったが、それを踏まえても座談会へ参加した方たちから前向きな感想や今後についての意見などが寄せられたことから、確かな手ごたえを感じることができた。交流会で実施したアンケートでは、過半数を超える人たちから「満足を得ることができた」という回答があり、何度か発表に使った自作のビデオクリップはDVDでの配布を希望する問い合わせもあったことから、各サロンについての冊子やDVDなどのラベル印刷をして、年明けにその完成品を町会や各団体へ配布した。

5 1年間を振り返って

地域づくりインターンとして始まったこの1年目は、慣れないことが多くどういった方向性で地域に関わればよいのかも解らない時期があった。しかし、ボランティア協議会の事務局としての参加を皮切りにサロンへの関わりが始まり、現在ではビデオクリップの制作や交流会の企画を行えるなど、本郷支所・公民館の方たちを始め、地域住民方の協力もあり、私は本郷地区の地域づくりインターンとして積極的に活動に取り組むことができるようになってきている。今後は、これまで実践してきた企画に加え、地元の小、中、大学生などを巻き込んだ新たな企画や、本郷地区の方たちに喜んでもらえるようなサロンへの取り組みを考えていきたい。

また、本郷地区には浅間温泉旅館の若い方たちが立ち上げる「タビオコシ

会」という団体があるが、こちらは浅間温泉の活性化を目的としたグループで「まちづくり」にも積極的に取り組んでいる。新たな活動として、そういった団体とも積極的に関わり、地域づくりインターンでの3年間を終えた後も本郷地区に残る成果を築いていきたい。